

就学に向けての準備と対応

2011/08/21 東京定例会

藤坂龍司

はじめに

就学はゴールではない。就学までにすべてをクリアしようと焦りすぎないこと。子どもの状態をかえって悪化させることもある。

6割程度準備して、あとは入学してから調整するつもりで。

1. 小学校で必要となるスキル（学校スキル）

(1) 学校サバイバル・スキル

- ・待つスキル（動作の維持）
いすに座って待つ、校庭に並んで待つ
- ・周りに合わせて動くスキル（即時模倣）
移動、並ぶ、起立・礼・着席
- ・他の人の振りを見て学ぶスキル・順番に行動するスキル（遅延模倣）
順番に走る、順番に朗読する
- ・指示に従うスキル（音声指示）
個別指示、名指しへの反応、全体指示
- ・あいさつを返す（音声模倣）
- ・朝のルーティーン（行動連鎖＝チェイニング）
- ・自分の学年とクラス、担任の先生の顔と名前を覚える（名前付け）
- ・スケジュール（時間割）の理解（順序）
- ・こだわりの克服

(2) アカデミックスキル

- ・国語スキル
文字の読み書き、朗読、黙読
- ・算数スキル
数の操作、足し算、引き算
- ・音楽スキル
歌を歌う、楽器を弾く
- ・図画工作スキル
絵を描く、はさみとのり、粘土

(3) 対人関係スキル

- ・友だちとの遊び
- ・友だちとの会話
- ・人付き合いのマナー
- ・自分の意見を述べる

2. 学校スキルの教え方

(1) 幼稚園・保育園での援助

幼稚園・保育園生活を送ることが何よりの学校準備。園生活にうまく適応できているのなら、小学校をそんなに心配する必要はない。ただし障害児の通園施設ではなく、健常児の集団に入れる必要がある。就学までに最低1年は健常児の通う園で過ごさせよう。

逆に園で問題行動・不適応行動が目立つようなら、早めに対処する必要がある。

<園での不適応>

- ・指示を聞いていない（不注意）。聞いても素直に従わない（反抗性）。
- ・じっとしてられない。待ってられない（多動）。
- ・思い通りにならないとかんしゃくを起こす。
- ・こだわりがきつい。次の活動にすぐに移れない。特定の場所（トイレなど）が苦手。
- ・お友達の物を勝手に取ってしまう。お友達の領域を侵してしまう（所有意識の欠如）
- ・お友達をたたく。ひっかく。かみつく（他害）
- ・いたずらがひどい。唾を吐く。物を投げる。こわす。高い所にわざと登る。
- ・自由時間に友だちの輪の中に入れず、ひとりでうろうろしてしまう。
- ・友だちと関われるが、自分勝手な行動や言動が多く、浮いてしまう。

<対処法>

①シャドー（付き添い）に入る

子どもの行動を変えるには、ABAを理解している人間がその場において、即時に介入することが基本。したがって親かセラピストが園で子どもに付き添うことが望ましい。

シャドーに付いていれば、その都度、適切な行動を指示し、プロンプトし、強化することができる。また問題行動は阻止または消去し、場合によってはタイムアウトなどの罰を与えることができる。

②遠隔操作

シャドーにつけない場合は、園の先生にお願いするしかない。面談や連絡帳などで子どもの様子を聞き、取ってもらいたい対処法を具体的に説明して、お願いしよう。

ただしあまりABAの知識を振りかざすと反感を買う。あくまで下手に出て、いい協力関係を保つこと。「上から目線」にならないように。

自宅で子どもに「明日はいい子にする」ことを約束させたり、その日悪いことをしたことを叱っても、あまり意味はない。行動を変えるには、その場でほめたり、叱ったりする必要がある。数時間後では長すぎる。

ただし比較的高機能の子どもの場合は、「がんばりノート」を持って行かせて、その日の終わりに担任の先生にそれを見せて、よくできている項目に○をしてもらうようにすると、効果があるかも。

(2) 家庭でできること

①1対1のセラピー

動作模倣、音声指示などを発展させて、学校サバイバルスキルのうち、大人一人で教えられるスキルを教える。

②「教室ごっこ」（サークルタイム課題）

家族やセラピストなど、数人の大人や子どもの協力を得る。一人が先生役になり、残りが生徒役に。数人いないと教えられないスキル（列に並ぶ、順番に行動する、全体の指示に答えるなど）を教える。

3. 指導のポイント

いくつかの学校スキルを例として取り上げて、指導のポイントを説明する。

<列に並ばせる>

現場での指導が基本。園や学校でのシャドーがベストだが、それ以外にも、日常生活の中で列に並ぶ機会はたくさんあるはずである。公園ですべり台の順番を待つ時、レンタルビデオ屋さんで順番を待つ時、駅のホームで電車を待つ時など。そんなときを利用して少しずつ教えること。

まずは大人と一緒に列に並ぶ。最初はしっかりと手をつないで。振りほどこうとしたら強く握り、振りほどこうとしないときは弱く握る。それによって振りほどこうとしないことを強化できる。

振りほどこうとしなくなったら、次は子どもがどこかに行ってしまう限り、手を握らずに自由を与える。ただし逃げようとしたらすぐに捕まえられるよう、常に神経を尖らせておくこと。子どもに脱走の楽しみを覚えさせてはならない。

次は子どもだけ列に並ばせておき、大人は少し離れたところで監視する。時々そばに近づいて、「じょうずに並べてるね」とほめたり、体に優しくタッチすることで強化しよう。

子どもが問題行動を起こしているときに駆けつけるのではなく、逆に子どもが大人しくしているときにそばに行くことがコツ。大人が駆け付けてしかったりなだめたりすることは、子どもに注目と言う強化子を与えてしまうから。

指導のコツの一つは、子どもが本来反応すべき刺激（例えば子どもの前に並んでいる子たちが前に詰めること）に反応する（自分も前に詰める）ように、声かけを最小限にして（「ほら、前よ」と言わない）、その刺激が生じたら即座に無言のプロンプト（背中を軽く押す）をして、正しく反応できたら、やさしく強化すること（「上手よ」）。声かけが多いと、声かけに依存してしまい、本来反応すべき事態に自発的に反応できなくなる。

<待つ>

ただいすにすわって、あるいは立たせて10分とか15分待たせる練習をするべきではない。

「一人で待つ」ではなく「みんなと一緒に待つ」ことが求められている。

園でシャドーにつけない場合は、病院の待合室や電車に乗ってる時間などを利用して、待つことを教えよう。

<アカデミックスキル>

小学校入学までに

- ・ひらがなの読み書き
- ・カタカナの読み書き
- ・数字の読み書き
- ・100までの数と簡単な足し算

をクリアしておきたい。

<文の読み>

ひらがなが文字としては読めるようになっても、文字のあつまりを意味のある単語や文としてとらえることのできない子どもが多い。

単語を理解させるためには、

①ひらかな単語カード（「うし」「うま」「くし」「くま」など）の受容的弁別（言うと選べる）

②ひらがなカードの表出（声に出して読める）

③ひらがなカードと実物（3Dフィギュア）ないし絵とのマッチング

が必要。

<ソーシャルスキルトレーニング（SST）>

ソーシャルスキルトレーニング（SST）は集団より個別で行なった方が効果が高い。

大人がモデルを示し（モデリング）、子どもにそれをまねさせる（リハーサル）。よかったこと、問題点を口頭で示す（フィードバック）。これを繰り返す。

例えば人を傷つける言い方をよくすることが問題な場合は、大人がその行動を誇張して演じてみせる。子どもに評価させる（「よくない」）。子どもにもその誇張した演技をまねさせる。うまく演じられたことをほめる。

次にその対極にある思いやりのある控え目な言い方を演じてみせる。子どもに評価させる（「いい。やさしい」）。子どもに同じ言い方を演じさせる。さっきより熱を入れてほめる。

いくつかのシチュエーション（状況）について、同じようによくない例、好ましい例を演じて見せ、特に好ましい例をまねさせ、強化する。

そのあと新しいシチュエーションで、あらかじめよい例のモデルを示すことなく、いきなり子どもに好ましい言い方は何かを考えさせ、演じさせる（「やさしい言い方をしてみて」）。上手にできたら気持ちを込めて評価する（「やさしいね」）。「やればできるじゃない」などと反発を招きかねない評価をしてはいけない。ふざけて人を傷つける悪い言い方をしたら、冷たく無視する。